

漱石来熊百年記念

「草枕文学賞」作品集

神様に一番近い場所

熊本県「草枕文学賞」実行委員会編

漱石来熊百年記念

「草枕文学賞」作品集

神様に一番近い場所

熊本県「草枕文学賞」実行委員会編

神様に一番近い場所

漱石来熊百年記念

「草枕文学賞」作品集

一九九八年二月十日 第一刷

編者 熊本県「草枕文学賞」
実行委員会

発行 文藝春秋企画センター

発売 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 東京〇三(三二六五)一二二一

郵便番号一〇二―八〇〇八

印刷・製本 凸版印刷

定価はカバーに表示してあります

*万一落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送り下さい。

ISBN4-16-008002-2

Printed in Japan

目次

漱石と熊本

熊本県「草枕文学賞」実行委員会

4

選考経過

選評

10

佳篇を得た慶び

江藤 淳

10

楽しい選考会

半藤 一利

11

小説を推進する力

奥泉 光

13

地元から

光岡 明

14

出色の構成

永畑 道子

15

優秀賞

神様に一番近い場所

吉井恵璃子

17

入賞

民宿猫岳

四季さとり

55

紙屋の良介

西国 葡

89

噴水のむこうの風景

岩森 道子

121

碧の子宮

島田 淳子

157

酔 眠

山本 直哉

193

草を枕に旅をする

光岡 明

229

第二回「草枕文学賞」募集のお知らせ

230

漱石と熊本



熊本時代の漱石

夏目漱石は、今からおおよそ百年前、ラフカディオ・ハーンの後をうけ、旧制第五高等学校の英語教師として熊本の地に赴任し、ロンドンに留学するまでの四年三カ月を熊本で過ごしています。が、その間の出来事や旅をもとにして、『草枕』や『二百十日』など熊本とゆかりの深い作品が数多く産み出しています。また、正岡子規とも親交のあった漱石は、俳句についても深い造詣がありました。が、全句作の四割に当たる約千句をここ熊本で詠んでいます。私生活の面でも、鏡子夫人との結婚や長女筆子の誕生など人生の節目とも言える時期を過ごしており、漱石にとって熊本という地は、思い出深いところであつたろうと思われます。

他方、漱石は私どもにとっても親しみ深い存在であります。漱石命名にかかる「森の都」は、豊かな緑と美しい水を育む熊本の別名として愛用され、漱石も教壇に立った竜田山の南に位置する赤煉瓦の校舎で学んだ私たち五高生は、自らを竜南三四郎と称して森の都熊本を闊歩したものの

でした。後に「引越し魔」といわれた漱石は熊本でも六回の転居を繰り返していますが、その内の三軒は今も大切に保存されています。漱石が泊まった旅館や『草枕』に出てくる「峠の茶屋」なども、往時の漱石をしのぶすがとして立派に保存、復元されています。さらに漱石ゆかりの地には句碑も建立されるなど、多くの熊本県民が漱石とのつながりを今なお大切にし、その文学を敬愛しています。

一昨年、漱石と熊本との関わりについて改めて見直すとともに、その来熊百年を記念して、新しい文学作品を全国から募集する「草枕文学賞」を創設しました。全国各地や海外から、また幅広い年齢層から八百八十三編もの多数の応募がありました。この企画は、多くの人々に漱石を読み直し、百年前に生きた漱石の精神を現代の人々の中によりがえらせるという大きな役割を果たすこととなったのではないかと考えております。

江藤淳先生をはじめ五名の選考委員の方々による厳正な審査の結果、優秀賞一編と入賞五編を選出し、このたび、それらの作品を単行本として発刊する運びとなりました。これまでお力添えをいただきました選考委員の皆様をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

ここに掲載された作品はいずれも秀作揃いですので、読者の皆様方には十分御堪能いただけるものと思います。

平成十年二月吉日

熊本県「草枕文学賞」実行委員会

委員長 熊本県知事 福島 譲二

装丁 坂田 政則
口絵写真 杉山 拓也 他
本文写真 角田 孝司
編集 井上喜久子

神様に一番近い場所

漱石来熊百年記念「草枕文学賞」作品集

選考経過

第一回「草枕文学賞」の最終選考会は平成九年十月八日午後四時三十分から東京帝国ホテルで、江藤淳、半藤一利、奥泉光、光岡明、永畑道子の五委員御出席のもとに開かれました。

応募作は平成八年九月末から九年三月三十一日までの募集期間中に八百八十三編が寄せられました。国内は北海道から沖縄県までの四十七都道府県すべてから、国外は韓国、中国、マレーシア、イラン、スペイン、パラグアイ、カナダ、アメリカ、ブラジル、オーストラリアなど世界各地から御応募をいただき、年齢も十四歳から九十九歳までと広範囲にわたりました。光岡明氏、永畑道子氏を中心に十五人の地元文学関係者が第一次選考を行い、八十編が予選を通過（作品名を「文藝春秋」平成九年九月号に中間発表）、さらに十編に選ばれ、最終選考会が

開かれました。

最終選考会では特に優秀賞をきめるために、五人の選考委員の間で二時間を越える白熱した議論が交わされ、その結果、吉井恵瑠子（熊本県）「神様に一番近い場所」が優秀賞、四季さとり（大分県）「民宿猫岳」、西国葡（スペイン）「紙屋の良介」、岩森道子（福岡県）「噴水のむこうの風景」、島田淳子（奈良県）「碧の子宮」、山本直哉（長野県）「酔眠」の五編が入賞となりました。

なお、十一月七日、熊本ホテルキャッスルで表彰式が行われ、半藤一利、奥泉光、光岡明、永畑道子の各選考委員のスピーチ、「草枕文学賞」実行委員会委員長福島譲二熊本県知事による正賞 肥後象岫の書鎮と、副賞 賞金（優秀賞百万円、入賞各三十万円）の授与などがありました。

選評

佳篇を得た慶び

江藤 淳

第一回「草枕文学賞」の話聞いたとき、大変結構な企画ではあるけれども、果していい作品が集まるものと心配した。ところが候補作十篇を通読して、これが全く杞憂だったことが明らかになった。文芸雑誌の新人賞や同人雑誌推薦作の候補作としても、立派に通用する力作揃いだ。だからである。

なかでも私は、吉井恵璃子氏『神様に一番近い場所』に深く感動した。深山の只中で山仕事に励む祖父と孫の姿が、銀行員の娘で市の臨時職員をしている藍子と対照させられ、彼女の眼を通じて活写されている筆力は、なかなか凡手のものではない。牛や木馬の描きかたも的確で、祖父の死にざまにも心を打つものがあった。

普通だったら高校生だという十七歳の樹生が、樹齢百五十年の巨木の立ち並ぶ森のなかに祖父の灰を撒く場面には、生命の永劫回帰と死と再生への畏れと願いが、見事に凝縮されている。こ

の佳篇を得ることができたのを慶びたいと思った。

そのほか、島田淳子氏『碧の子宮』、西国葡氏『紙屋の良介』、四季さとる氏『民宿猫岳』、山本直哉氏『醉眠』、岩森道子氏『噴水のむこうの風景』など、いずれも作者の持ち味と力量のうかがえる作品ばかりで、読んでいて愉しかった。ただし、『碧の子宮』は表題に一考をわずらわせた。『紙屋の良介』は話が予定調和的にまとまり過ぎているところが気になった。

『民宿猫岳』のユーモアは捨てがたいが、ファンタジーに破綻のあるのが残念で、『醉眠』、『噴水のむこうの風景』も、文学的にやや荒削りに過ぎるところに問題が残るように思う。しかし、いずれにせよ、近來こんなに愉快な文学賞の選考会はなかった。主催者に心から感謝したい。

楽しい選考会

半藤一利

人物がしっかりと描けていて、ストーリーが楽しくて新味があつて、主題が斬新で、文章と構成がきちんとしている。そのうえに、「草枕」と冠する以上、応募規定にもあるように、熊本の歴史・風土をイメージさせる、すなわち熊本度の高い作品を、とそんな心づもりで候補作品を読んだ。

事務局のよき配慮で、作者略歴は選考会の当日に渡されたから、住所・年齢・職業はもとより文学歴など、余分なことを加味することなしに、ひとつひとつの作品に接した。ずいぶん公平

なことであつた。

結果として優秀賞に熊本県在住の吉井さんがえらばれた。賞にとつても目出たいことだと思つたし、はじめからこの作品だときめていたから、楽しい選考会になった。

なにより吉井さんの作品は人物が実によく描けている。とくに主人公の十七歳の少年がいい。祖父もいい。山の仕事をとおしての自然も美しい。方言がよく利いていて、それこそ熊本度は高かった。銀行員の父がやや典型的であるが、我慢のできないほどではなく、読み終つて心からうまいなあと思つた。

もうひとつ、西国さんの作品を推した。前半はよくできているのに、宮崎ができてからの構成に難がちょっとあつたが、面白く読めた。とくにマラソンの描写は拔群である。あとでスペイン在住と知つて、スペインで毎日走っているのかな、とさえ思えた。これが優秀作になつても異存はなかつた。

文章のうまさからいったら、四季さんがいちばんではなかつたか。達者の一語につきる。達者すぎて、作者自身がすっかり楽しんで、せっかくの壮大なメルヘンなのに、読者に面白さを感じさせる丁寧さを忘れてはいまいか。

岩森さんは小説づくりの手だれとみた。外人妻・散骨とトレンディな作品である。でも新しきより古さを感じたのはどうしてだろう。

蛇足と承知して一言。ノンフィクションを書き読んできた私としては、候補作が小説ばかりというのはまことにさびしかった。

小説を推進する力

奥泉 光

最終候補に残った十編の作品を読んで、四季さとする氏の『民宿猫岳』を私は最も高く評価した。自分の選び取ったスタイルについて意識的である、この点で『民宿猫岳』はぬきんでており、一編のメルヘンとして成立させるべく、作者はそれにふさわしい「かたり」を選びとり、楽しい作品に結実させた。

「かたり」の面白さこそ小説の醍醐味の大きな部分を占める。これはまさしく漱石が『吾輩は猫である』以来の作品において、なにより『草枕』でもって具体的に示してくれた事柄であって、その意味でも優秀賞にふさわしいと思われたのだが、意外に票を集められず、入賞作にとどまったのは、私には少々残念であった。とはいえ、この作品が活字となって人の眼に触れる運びとなったことは喜ばしい。

他の九編については、それぞれに長所短所はあるけれど、総じていうなら、小説（紀行文を含め）を推進していく力が弱い、あるいは「物語」にのみ頼って小説が進められて、言葉そのものが小説を動かしていくスリルが薄い、つまりは「かたり」に魅力がなく、低い評価になってしまった。なかでは『紙屋の良介』と『醉眠』に言葉が動き出す気配が僅かに感じられたものの、両作とも話に無理があり、無理を押し通すだけの言葉の力が残念ながら足りなかった。

優秀賞に決まった『神様に一番近い場所』は、話にはほとんど無理はない。しかしそれは、われわれが慣れ親しんだ「物語」の構図から小説が一步も出ていないからで、たとえば小説中で「森」の雰囲気がうまく描かれているにしても、ここでの「森」はわれわれがよく知っている「森」にすぎない。誰も知らなかった「森」を描くことこそが小説ではないか。

無理のないものなど面白くない。無理をむしろ呼び込み、なおゆるぎない構築物にもたらず言葉こそが、小説の名にふさわしい。

地元から

光岡 明

応募数八百八十三編と聞いたとき、永畑道子さんともども茫然となった。やはり手助けを頼まないで、永畑さんと私とで全部を読むわけにはいかない。ふたりのほか十三人の熊本県内の文学関係者に予選読みをお願いし、ひとりを読んだ分をもうひとりの方が読むようにして、予選を行った。○△×で評点をつけて頂き、短い推薦文を書いて頂いた。

その結果、永畑さんも私もそれぞれ百四、五十編を読んだ。そして討論しながら第一次予選通過の八十編を選び出した。そしてそれを最終選考十編にしぼりこんだのは永畑さんと私の責任である。江藤淳、半藤一利、奥泉光各氏と永畑、光岡のふたりで行なった最終選考で、公表のとり決定した。